牧場はるかに若駒あそぶ
にぎはしき村の祭の中過ぎて
悲しくなりぬ我がひとり旅
君がめでし白き桔梗をたむくれど
君もいはず墓のつめたき
一しきり百舌啼きたてゝ霜かれの
林の奥に日はかたふきぬ
長閑なる村の夕べや子は家に
鳥はねくらに家に烟の

瀧廉太郎の君の一週忌に

東くめ子

峯の松風　もろともに
妙なるしるべ　かなでつる
瀧のしら糸　たえはてゝ

名のみ殘るも　はかなしや
かたみの曲を　とりいてゝ
ピヤノによれば　たちまちに
くしくもひゞく　樂の音は
君かむかしの　しらべなり
きくにえたえぬ　わがこゝろ
ひく手も胸も　亂るゝに
ゆめかわらぬか　まはろしの
見ゆるぞうせし　友の面影

松島に遊びて紅蓮女がとを思ふ

小林雨峰

かつて芭蕉がみちのくの記に謠はれし松島の奇勝は、われの常に東北に遊ぶ毎に、神飛魂往せさ

るをなかりき、去年の夏またもや遂に空しく看過して、遠く〳〵北海の天にさすらひしが、今年はよしなき事のありて、われは松島の奇勝に接するの機會に接しぬ、

されど〳〵日本三景の一と稱へられ、幾たび天下の詩人墨客の水莖のあとに描かれたるこゝ松島の奇勝、今われ禿筆を驅りて、其が全豹を寫さんも、恐くは美神の呪咀をや受けむ、われは別に感懷に映りしものあるなり、讀む人わが松島の奇勝を說かざるを怪み給ふなかれ、

仙臺に一夜を明かしあくる日ふりしきる雨を犯して、松島驛よりゆきて、海近き新富山の頂に攀ぢ上る、濛々たる煙雨あたり深く籠めて、夏尙は寒きを覺えつ、灣內を眺むれば、かしここゝ、皆な淡灰色の如き衣につゝまれたらんが如く、煙巒の姿、雨島の影、悉くわか眼を遮きりて、例へば七重八重にたて籠めたる簾の中なる美人の姿をかいまむに似て遺憾之に過ぎたるはなかりき、一島二島、島の姿雨のたえまよりちらはらと見ゆれども油繪の如き群島のそれとしるく見えかねしはいかに心のこりせられしぞ、われはたゞ雨中島影の朧なるを眺めて、この天下の奇勝に對して、憾を呑むも詮なかりき、

山を下りて雨にそぼちし裳をかゝげ海の岸を迂り、翠松蟠窟の如く蟠まれる五大堂の畔に休ひ、曾つて稻舟女史が筆に上りし迹を想ひ、かくて其のつれなき女詩人がはかなき最後を遂けつ、世を怨み、人を呪ひ、惜しき命を海底の藻屑と共に失せしめし、其の因緣の憐なるを想ひ出て、去つては瑞巖禪寺の法窟に獨眼龍政宗公の雄圖を察し、

門を出て、觀瀾亭の邊に全島の奇勝を瞰下す、詩興頓に湧起せらるゝものあり、

されど〳〵われは全島の奇勝が如何にわが眼底に映ずるも、われは是を以て滿足するにはあまりに え堪へぬなり、徐ろに歩を運びて、われは紅蓮庵に少女紅蓮が遺跡を探りて、暫しわれはこゝに詩中の人となれり、

凡そ人の身の上の運命なるものは、何時如何なる事になりゆくものなるか、測るべからざるは人の身の上のそれなりかし、あはれ人生の一面を思へば海上の浮鷗に似たらずや、

紅蓮のあはれなる身の上を思ふ、予はこの風勝の絶群なるそれよりも、觀瀾亭いさびに寂びて、桃山の榮華の俤も一朝にして衰ひし昔時の夢を辿らんよりも、あるは瑞巖の禪窟に、ありし法師が

悟達の迹を考ふるよりも、われにとりては紅蓮の事蹟のいかにわが胸に迫りて切哀の念を高めしぞ

街道の東側、觀瀾亭邊の小宇、今は軒破れて門扉傾き、雜草苔に埋れてたゞ寂寞、雨悲み風荒むの處、濤聲宛も悲嘆の聲の如きのあたり、實にこれ紅蓮が庵の存するところとなす、

曾てわが友樵村は落飾の美觀なる一文を草して悲哀の快感を說きしをありしが、われは今紅蓮の事を思ふてまた樵村と同し感に撲れぬ、

紅蓮の人となりは詳しからず、一基の石ぶみを摩して悲哀なる人の俤を偲ぶに、紅蓮は羽前商家の娘なりしが、長して既に他に嫁するの約整ひしが、幾多の事情は遂に良人の死を招きさては紅蓮は世に背き、人に背きたゞ良人の昔を思ふて此處松島の假りの庵に住みわぶをの墓なき事となり

しなりとぞ、

庵前に一株の梅樹あり『軒端の梅』とぞ誌されけり、嵯峨たる枝は幾條に交はり、鹽風に荒める苔は青く錆びて、老幹殆んど百年あまりの星霜を經たらむか、と思はる、案内の老媼は梅樹の因緣を語りていふ、

『この梅樹こそはこの紅蓮の良人なる某が植えたるものなりしが、紅蓮こゝに住へるとき、既に、わが良人なる人の死にうせてありければ、はやこの梅の花咲きたりとて何かせむと、一首の國歌を讀み出てたれば、それよりは梅咲かずなりぬ』と、

物語は極めて簡なればつばらなるをは知れ難けれども、年若うして最愛の良人に別れて、落飾入道、世の榮華を見るを脱履のそれよりも輕く、わらゆる愛着のきづなを斷じて、ひたふるにみ佛の道を仰きて、良人の菩堤をこの小庵に營み、こゝに一生を送りしと悲むべからずや、

半ば枯れかゝりし梅樹に對すれば、かの國歌によりて咲かずなりしと云ふ風情の如何にゆかしき詩味を存するか、試に冥想し來れば生命をつくして厚く且つ濃き愛情を灑ぎたりしふのが良人の死の淵に失せしをの刹那、如何に紅蓮は悲みの情に撲たれしぞ、世のわらゆるものは愛慕の情に勝りて何物も如くべきものゝ存せざれば、

見よソロモンの榮華の極も、この愛情の力の前には、何等のオーソリチーかあるべき千びきの巖も何かせん、況んや四季折々に咲き出づる花の數々匂ふとも、紅蓮が眼には何の樂をか捧ぐるに足るべき、梅の花咲かずもあれと諦ひし情の奥底に潜めるうちに何物をか藏せるかを想像せよ、純

淨潔白の愛の滴り以外に何物かあるべき、げにやあらゆる女子の生命は愛情の外に何等の力をも有せざるなり、

さあれこゝ宇宙の宏大も一塊の塵よりも小と見られ、千万金の富貴、智識、虛名、其他あらゆるものの何を以てこの紅蓮をして滿足せしむべき、

紅蓮は既にこの愛情を注ぐべきの對手を失ふ、花に泣き、月に泣き、風に雨に泣かざるなきの情緒となるの止むなきをいかにせん、われは此の純淨の愛情を偲びて其の可憐の境遇を傷まざるを得ず、

人は落飾の風を以て厭世の感化と嘲ける、厭世の情や必ずしも可なるにあらず、されと〳〵紅蓮の如きは既に抱ける純淨の愛、潔白の情、今既に施すべき天地を見出すを能はずなりたるを如何せん、たゞそれ、

こゝに女子の本性の宿れるを見ずや、こゝに悲哀の美神の住せるを思はずや、かくの如くに想ひ出たせしわれは、この松島の勝境に遊びて、この悲哀なる故事を追ふ、更らに世の人の多くはこの風景の優美を說きて、この可憐の少女が閱歷を說くなし、怪しからずや、

われはかくて今、紅蓮の小庵を廻ぐり、眼を放つて灣内を望む、煙雨漸く薄らき、翠蓋をかさせる島嶼の影、海に浮き出づるものこゝかしこ、鷗二羽三羽輕やかに飛びかふあたり、しかも紅蓮はこの仙境に背きて永へに眠れるなり、憐れならずや、

世の心ある人、來りて此の勝境を踏まんものは、一たび脚を紅蓮の小庵に運べ、梅樹影暗く、軒端

に聳え、門扉うらさびて風雨にさらされ、破庵軒傾きてまた經聲の聞ゆるなきの處、苔むせる石碑に對して、紅蓮の事を思はゞ、幽魂髣髴として降下するものわらん、

（七月十五日）

○フレーベル會俳句端書集

一、課題　秋季雜吟一人十句以下
一、〆切　八月二十五日限り
一、披露　十月發行本誌文苑欄
一、賞品　天地人三座には美景を呈す
一、撰者　當分本會の撰とす
一、投稿　本誌講讀者は何人にても投吟することを得、用紙は端書に限り（可成繪端書に記載せられたし）住所氏名雅號を明記し都合上必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛
鹽野奇零

○第一回俳句端書集

山里に平和を唄ふ田植かな　釜山　木戸笹舟
馬曳て歸る野道や飛ぶ螢　同
川形に流れを亂す螢かな　仙臺　立花一瓢
白牡丹誠の色を咲きにけり　同
戀ならで月に恨みや螢狩　長野　蘿月庵天眞
馬借りた禮に手傳ふ田植かな　同
簑笠に老をかくして田植かな　同
蝶も羽を伏せて落付く牡丹哉　東京　福島松水
檜柏子の彼方此方や夏の月　釜山　阿比留藤子
早乙女の手拭白き揃ひかな　同
牡丹散て暫し花檀の別れ哉　東京　久米辰子